

小中学生の保護者の皆様へ ご家庭で子どもと向き合うヒントをお届けします。

子育ては温かい表情と共に

学校発達心理研究所 代表・研究統括官
上級スーパーバイザー
笈田 憲

日本の法律では、子どもの身体に危害を加える行為や監護を怠る減食・放置などだけでなく、心理的な苦痛を与える言動についても禁止しています。たとえば、子どもを怒鳴りつける（叱責、いやしめ、おとしめ、不安誘発）行為は、言葉による虐待になる場合があります。これらの行為は、子どもの人格を著しく傷つけるだけでなく、脳の発達に深刻な影響を及ぼすこともあります。

行動の心理学では、1つの問題行動をやめさせるために強い罰を与え続けると、その行動がなくなるどころか慢性化してしまったり、罰を受ける恐怖から自分を守るために隠れてやったり、違うかたちで不適切な行動が出てくることを指摘しています。つまり、子どもを怒鳴れば一時的に問題行動がおさまるように見えても、真の改善には結びつかないことを意味しているのです。また、認知の心理学では、怒鳴られることは、叩かれるのと同じだけのダメージを受けることを指摘しています。それは、叩かれると心に傷が残り、怒鳴られると脳に傷が残るのです。



それなのに、大人はなぜ子どもを怒鳴るのでしょうか。その1つの要因を学習の心理学から考えてみましょう。幼少のころ、親や先生から激しく叱責されることが多かったひとが大人になったとき、「あのような苦痛を同じようにわが子に経験させることは避けたい。だから自分はそんな大人にならないようにしましょう…」ところが、わき上がる怒りの矛先がわが子に向いてしまう。ひとは「思い」よりも「学習」したことを優先してしまうことがあるのです。（怒鳴られることで行動したり、修正したりすることを学習してしまったのです。）

なお、言われた通りにしない、言われたことが出来ない。このようなわが子に対して怒鳴ってしまったら、「厳しくしないから子どもがしっかりしない！」と、古い観念にこだわり、強く叱責してしまったり、「完璧さ」や「厳格さ」を過剰に求めることによって引き起こされる行為も心理的な虐待につながる可能性があります。場合によっては、子どもへの怒りのはずが、思い通りにならない自分への怒りになっていることもあるようです。

子どものためだと言いながら、激しく叱責する大人の姿は、親を愛してやまない小さな瞳にどのように見えているのでしょうか。わき上がる怒りのサインを感じたときは、鏡や窓に映る自己を見つめ、子どもと適切にかかわっているか、よく考えてみてほしいのです。実は、怒鳴りつけなくても、大人の思いは伝わるが多いのです。「わが子の心に映る自分は、温かい表情に満ちているか…」自分自身に問いかける機会があってもよいかもしれません。



家庭教育学習会の

動画を配信中!



©大田区

大田区公式

YouTube チャンネル



ぜひご覧ください!

小学校低学年の子どもと向き合うために
～日頃のわが子とのコミュニケーションをふりかえろう～

○家庭教育学習会の講義の一部を、ダイジェスト版でご覧いただけます!

令和5年3月3日、大田区教育委員会主催の家庭教育学習会「小学校低学年の子どもと向き合うために～日頃のわが子とのコミュニケーションをふりかえろう～」を実施しました。講師をしていただいた発田憲さんの講義の一部をお届けします。

学習会では、子どもの発達・成長に目を向け、子どもとのかかわり方や家庭でのサポートについて学びました。また、同年代の子どもをもつ保護者同士で、日頃の悩みや考えなどを聴き合い、一緒に考えました。

○講師プロフィール

発田 憲 (ほった けん) 氏

カリフォルニア州立大学卒、他、複数の大学・大学院で研究、博士前期課程修了。専門は発達心理学領域。英国王立大学を始め、欧米の大学との共同研究・講義者、私立学校の管理職・顧問を経て、国内大学での講義者、文部科学省の研究事業（指導支援法等）、教育委員会の研修講師（校長研修等）・研究委員（いじめ防止対策委員等）として公教育の支援に従事。幼稚園・小学校・中学校での教育相談／発達支援のスーパーバイザーとして、教育活動を実践。